

# 函館で護憲大会初開催、二〇〇〇人が参加

◇ 「戦争できる国づくり」が進むなかで

「フォーラム平和・人権・環境」などの平和運動団体が実行委員会を組成して毎年秋に開催している「護憲大会」の第五六回目となる、「憲法理念の実現をめざす第五六回護憲大会」が、二〇一九年十一月九日（土）～十一日（月）の三日間、北海道函館市の函館アリーナ（函館市湯川町）をメイン会場として開催された。今次大会のメインテーマは「平和・自由・人権すべての生命を尊重する社会を」。穏やかな秋晴れの天候のもと、大会には道内外から約二〇〇〇人の参加者が集まった。

護憲大会の北海道での開催は、一九八二年の第一九回札幌大会、一九九六年の第三三回札幌大会に続いて今回が三回目、函館市での開催は初である。

護憲大会の開催の趣旨は、「憲法の平和と民主主義、人権尊重の理念を日本社会において実現するために、全国の人びとの奮闘を持ち寄り、その内容を豊かなものとする」ことにある（第五六回大会「開催の呼びかけ」二〇一九年八月）。

日本ではこの間、二〇一二年一二月に発足し今日も継続する第二次安倍政権のもと、特定秘密保護法、マイナンバー法、集団的自衛権の行使を可能にした安保法制、共謀罪の創設を含む改正組織的犯罪処罰法など、日本国憲法の掲げる平和主義や基本的人権の尊重の理念に沿わない法制度が相次いで制定されるとともに、沖縄県民投票の結果を無視した米軍辺野古新基地建設の強行、海外への自衛隊の恒久基地の設置および同基地への自衛官の常駐など、「戦争できる国づくり」が着々と進められてきている。その積み重ねの先に、同政権は自衛隊の憲法明文化と緊急事態条項の導入を核心とする明文改憲の実現への意欲も示し続けている。

今次大会の基調提案には、こうした現下の政治情勢のもとにあつて、右記の趣旨を有する護憲大会の果たすべき役割はいっそう大きくなつていくと記された。あわせて、太平洋戦争末期の空襲被害やサハリン帰還者の受け入れといった歴史を持つ函館の地で大会を開くことにも深い意義があるとし（実行委員長「歓迎のあいさつ」）、歴史から現在を照射する視点の大切さにも着目していることがうかがえた。

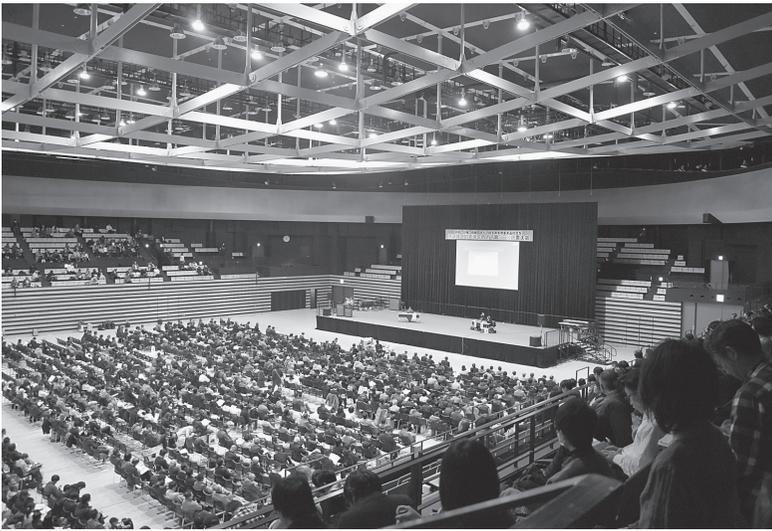
◇ 揺らぐ憲法の理念、守るべき価値は何か

地元振興会によるオーブニングアトラクション「函館巴太鼓」で幕を開けた大会一日目は、開会総会での基調提案などを経て、この日最後のプログラムとなるメイン企画へ。

メイン企画「日本社会は本当にこれでいいのか？ 安倍政権の7年を問う」は、憲法の視点から日本社会の現状や現下の政治の本質を浮き彫りにすることを趣旨とした公開鼎談であり、清末愛砂氏（室蘭工業大学大学院准教授）、兩宮旭凜氏（作家・活動家）、中野麻美氏（弁護士）の三名が登壇し、それぞれの経験や立場から発言を行った。

まず、この十数年、貧困問題の分野で積極的な発信を続けてきた兩宮氏は、安倍政権によってこの間段階的に進められてきた生活保護基準の切り下げや、いわゆるアベノミクスのもとでの非正規労働者のさらなる増加といった現象を捉えて、二〇〇〇年代半ば以降ようやく国内の重大な社会問題としてクローズアップされた貧困は、安倍政権の下で改善・解消に向かうどころか、自己責任論を背景にいつそう深刻化・常態化していると指摘した。

あわせて、一九人の障害者が元職員に刺殺された相模原障害者施設殺傷事件（二〇一六年七月）に触れながら、日本社会には現在、国の財政や経



効率性をより重視する観点から、障害者など「生産性が低い」と評された人は選別されても仕方がないという不寛容さが蔓延していることに大きな危機感を感じているとし、その上で、貧困者や障害者への差別や「命の軽視」をやめ、「個人の尊厳」と「命の平等性」という当たり前の価値を回復していくことの大切さを訴えた。

続いて、労働問題に関する著書や訴訟への取り

組みで知られる中野氏からは、現在「働き方改革」の名で進められている安倍政権の経済政策や労働政策の本質をどのように理解するべきかが説明された。

すなわち、「働き方改革」の前提には、個人よりも国家を優先する国家主義の思想があり、そのめざすところとは要は個人を国家の道具として動員することであると、これは経済における国家総動員体制の構築を意味するとした。その上で、国家が個人を道具と見なす最たる行為が戦争であり、国家のために個人を動員するという点において「アベノミクス」や「働き方改革」は戦争と本質を共有していること、「自民党憲法改正草案（二〇一二年四月）などの改憲案の内容には、これら現行憲法の理念とは相容れない諸理念を改正後の憲法で保障させようとする意志がうかがえることが指摘された。

清末氏によるまとめの発言では、憲法二四一条（家族関係における個人の尊厳と両性の平等）の意義などにも触れながら、現行憲法の謳う理念は日本社会では未だ全く実現されておらず、まずはその実現を先に達成するべきであるとの認識が語られた。

このメイン企画を通じ、日本では現在、現行憲法の掲げる理念・理想を引き続き追求していくか、現状に合わせた水準に憲法を引きずり下ろすかの分岐点にあることがあらためて実感された。

## ◇ 次回に向けて、継続する課題

大会二日目には、午前中から七つのテーマの分科会と、フィールドワーク（二コース）が行われたほか、午後からは三つの「ひろば」（テーマ別交流会）も行われた。

三日目の閉会総会では、「大会のまとめ」、次回大会の開催地からのあいさつ、「大会アピール」の提案などが行われ、今次大会の全日程を終了した。「大会アピール」では、憲法理念に立ち戻り、それを実現させるために全力を尽くさなければならぬことなどが確認されている。

最後に、右記の「大会のまとめ」は、メイン企画での中野氏による印象的な発言をいくつか取り上げている。本稿でもこれを以下に記して紹介し、締め代えたい。

「貧しいことは恥ずかしいことではない、恥ずかしいことは貧しさに追いやっていく社会の構造を知ろうとしないこと、知っていても挑もうとしないこと」。

「憲法、平和、権利は私たち自身が勝ち取っていくものであり、現実から目を背けず、また、死者の声にも耳を傾け、この時代にこう生きたというものを残すとともに、どう闘ったか次の世代に誇りあるものを残していこう」。

△編集部・正木浩司△